

スポーツ科学におけるスポーツ社会学の学問的意義

—<スポーツの課題>と<生活の課題>の狭間でスポーツを考える—

橋本政晴(信州大学教育学部)

キーワード：スポーツ科学，スポーツ社会学，スポーツの課題，生活の課題

1. 問題提起——2020 東京オリンピックをめぐる

二つのスポーツ社会学

コロナ渦以前から、スポーツ社会学では2020 東京オリンピックに対して「No!」を突き付ける論考が発表されていた。例えば、『反東京オリンピック宣言』[小笠原・山本航(編), 2016.8, 航思社]や『で、オリンピックやめませんか?』[天野・鶴飼(編), 2019.8, 亜紀書房]がその代表格である。内田が「現代スポーツの社会性」[1999, 世界思想社]という現代スポーツを俯瞰した論考で指摘しているように、①莫大な資本、②高度なテクノロジー、③多様なメディア、④広範な観客、という四つの要素が複合して成立しているオリンピックは、もはや政治・経済とは無関係のイノセントなスポーツイベントではなく、都市の再開発やナショナリズムと結託したグローバルな政治的イベントであると論者たちはいう。こうしてスペクタクル化されたオリンピックに対して、人びとが抱く様々な異議や違和感を組織化するためにも、彼らは「スポーツの意義」を問い直すことを通じて、「アンチ」を強く宣言している。

他方で、オリンピックがもはやイノセントなスポーツイベントではないことを引き受けつつも、東京オリンピックの実効性を多角的に問い直す論考も発表されている。例えば、『2020 東京オリンピック・パラリンピックを社会学する』[日本スポーツ社会学学会編集企画委員会(編), 2020.4, 創文企画]や『未完のオリンピック』[石坂・井上(編), 2020.7, かもがわ出版]がその代表と言える。「No!」を突き付けるのではなく「レガシー」という視座から、東京オリンピックが正しく成功し、遺産として引き継がれる姿を描き出そうとするこれらの論者たちは、JOCやIOCといったスポーツ組織が定義する以上のレガシーを、2020 東京大会で生み出していくための方途を多角的に検討している。メディア、ユーススポーツ、国際貢献、スポーツ参加、スポーツ政策、障がい者スポーツ、女性スポーツ、ボランティア政策、地域スポーツ、学校体育といった多様な領域で、東京オリンピックのレガシーが正統に継承される方向性を学問的に検討することが、スポーツ社会学の使命でもあるという意図のもとに。

これら二つの議論は、スポーツ科学にとってどのような学問的な意義があるだろうか。いやそれ以前に、スポーツの世界的な祭典としてのオリンピックに対し

て、ベクトルは違えども疑義を挟み込むスポーツ社会学という学問自体に、スポーツ科学の研究者たちは戸惑いを感じるのではないだろうか。

2. 課題と目的——健康と体育に関する

スポーツ社会学をめぐる

スポーツ科学におけるスポーツ社会学の居座りの悪さは、オリンピックをめぐる諸問題への言及にとどまらない。日本体育学会が、「日本体育・スポーツ・健康学会」へと名称変更したことから明らかなように、「健康」と「体育」はスポーツ科学においては中心的なテーマであり、スポーツ社会学においても、多くの論者たちがこれらのテーマについて議論してきた。

例えば、『健康不安の社会学』[上杉, 2000, 世界思想社]や『現代人にとって健康とはなにか』[竹内(監修), 2011, 書肆クララルテ]では、「スポーツは健康に良い」という神話が社会的に創り上げられ、そのことによってスポーツの意義が狭隘化されることに異議を唱えている。健康とイコールであるとされること以上のスポーツの意義に豊饒性を見出し、普遍的に定義づけられることのない健康観がそこにはある。

また、『身体教育の社会学』[ましこ, 2019, 三元社]や『真正の「共生体育」をつくる』[梅澤・苜野(編), 2020, 大修館書店]では、身体能力を涵養している学校体育は、特定の身体技能を評価対象とすることで格差と排除を可視化することに与しているという。すなわち、「成長社会」のための体育であるがために、上達や達成が主軸となり、画一化された身体が希求されている。包摂(インクルージョン)をベースとした「共生社会」のための体育に取り組むことで、身体とその能力の多様性を確保し、そのための実践的な取り組みを提唱しているのである。

このように、「健康」と「体育」というテーマに対してもスポーツ社会学は手厳しい。批判の真意は、現在の<スポーツと健康/体育>の在り方は、人びとの社会関係を分断していることに起因している。

これらのテーマに限らず、スポーツ社会学の居座りの悪さの背後には、「スポーツをめぐる課題」と「生活をめぐる課題」との接続・乖離にあることを学問的に整理することを目的として本報告を行い、スポーツ社会学の学問的な意義の問い直しを試みる。